

「医療福祉」、川崎病院から旭川荘、そして川崎学園へ（その1）

今年創立25周年を迎えた川崎医療福祉大学は、1991（平成3）年4月、日本で最初の「医療福祉」の概念に立つ4年制大学として開学しました。この開学は、社会福祉法人旭川荘の運営などを通じて医療と福祉の一体化を永年思考し続けた川崎祐宣学園長、川崎明徳理事長（当時）らの想いが具現化したものでした。



川崎病院院長時代の
川崎祐宣先生

「医療福祉」の源流、 日々の診療の中から

「医療と福祉は一体でなければならない」、この「医療福祉」の考えは、川崎祐宣先生が医師として川崎病院（附属川崎病院の前身）で日々患者と接する中から生まれました。そして、1957（昭和32）年、

「総合医療福祉施設」旭川荘を創設するに至ります。

医療福祉大学が開学した年の10月、学生・教職員への特別講和の中で次のように話されています。

「どうして私が、病院だけでなく“医療福祉施設”をつくりうと思ったか」というと、外科のたくさんの患者さんの中に肢体不自由児・知的障がい児が混じっていました。その当時日本では、障がい児をもつ親はそれは家庭の恥であると考え、私にこっそり往診を頼んでくるような状態であり、患者は家の一番奥にある納戸という部屋で、一人静かに生活しているような社会環境でした。私はこれは放置できないことだと思いました。

福祉施設も数か所を見に行きましたが、まったく話にならない施設で、医学的な配慮は行われていない状況でした。私は日本にもっと立派な施設が必要だと考えて、1954年から約半年ほど欧米の施設を視察しました。

これらの見聞をもとに、江草先生^{*2}や堀川先生^{*3}と相談してつくったのが、「医療福祉施設」である旭川荘です。なぜ「医療福祉」という名前をつけたかというと、福祉の事業は極めて幅が広く、幼稚園から授産施設や厚生施設まで福祉の名がつられています。私は「医療福祉」



左から、川崎祐宣、堀川龍一、
江草安彦の3人
(1987年4月21日撮影、山陽新聞社提供)

祝 川崎学園創立20周年 川崎医療福祉大学開学 記念式典



1991年10月27日、川崎学園創立20周年・医療福祉大学開学記念式典で式辞を述べる川崎明徳理事長

は医師が中心となって診断しながら、福祉の援助を行うことであると考え、旭川荘をつくりました。今から34年前です。日本で初めての“医療福祉施設”です」（『川崎医療福祉大学創立10年誌』より）



毎週行われる園長回診で治療プログラムが立てられた

旭川荘の創設、川崎病院の支援と協力

旭川荘創設は、財団法人川崎病院の事業としてスタートしました。他からの援助を當てにせず、資金は川崎病院から拠出する計画でした。



開設当時の園児たち

1954年7月に発表された旭川荘設立趣意書には、当時の岡山を代表する方々が発起人に名を連ね、新聞は「民間人の手で、総合社会福祉センターが岡山県下に実現する」と大きく報道。

岡山県内はもとより全国から関心と期待が寄せられました。当時の三木行治岡山県知事の力強い協力、お年玉年賀はがきの交付金等により、当初の計画より早く、構想発表から3年で肢体不自由児施設、精神障がい児施設、乳児施設の3施設を開所しました。

川崎病院の職員もこの計画の意義をよく理解し、建設寄附金第1号を投じました。旭川荘の児童・職員の医療低額取扱・救急医療取扱、役員・医師・看護師などの兼務・出向、器械器具の提供、クリーニング受託・旭川荘生産のコンクリートブロック・卵・野菜等の購入等、多大の協力と支援を行いました。

*1 川崎祐宣：外科医、財団法人旭川荘 初代理事長（1956～1985）

*2 江草安彦：小兒科医、知的障がい児施設「旭川学園」初代園長（1957～1967）、旭川荘第2代理事長（1985～2007）川崎医療福祉大学初代学長（1991～2003）

*3 堀川龍一：整形外科医、肢体不自由児施設「旭川療育園」初代園長（1957～1993）、旭川荘初代園長